神と共に歩む人生

ヴィルヘルム・ブッシュ

（8回連載、第2回）

第二章　何のために生きるのか

人は何のために生き、また何のためにこの世に存在するのでしょうか？人生の意味とは何なのでしょうか？

私がエッセンという町にいた時、ある友人の実業家から取り乱した電話がかかってきました。「すぐ来てください」。私が急いで駆けつけると、彼は「息子が銃で自殺した」と言いました。私はその息子さんを知っていました。当時、彼は学生で、欲しいものは全て持っていました。若く、健康で、美しく、豊かで、高級車も持っていたのです。しかしこの若者は銃で自らを撃ちました。彼が残した手紙には次のように書かれていました。「私は、これ以上何のために生き続けるべきか、その意義が見出せないので、これで終わりにします。私の人生には意味がありません」

人生が持つ意味は想像を超えて深く、大切なものです！人生はたった一度しかないのですから、それはとてつもなく大きな問題です。たった一度しかない自分の人生。あなたはその意味について考えたことがおありでしょうか？

私は学生時代、数学が苦手でした。先生は私の答えを全く評価してくれず、提出した私のノートは赤字で一面に訂正して返されてきました。この面白くもないノートにはまだ使えるページがいっぱい残っていましたが、捨ててしまいました。そして新しいノートを買いました。そうすれば新しくやり直すことができるからです。これと同じように、私たちの人生もやり直しがきけばいいのに、と思いませんか？

多くの人々は死ぬ時、「全く最初からやり直すことができれば、私はそうしたい。全てを違ったふうにやり直したい」と思うかも知れません。

学習ノートは買い換えることができ、やり直すことができますが、人生はそうはいきません。私たち

の人生は一度しかありません。私たちが一度きりの生き方を間違えることがあれば、それはどんなにか恐ろしいことでしょう。その人生を台無しにすると、それは永遠にわたって台無しになるのです。この問題は深刻に受け止めるべき)ではないでしょうか。

今朝、私が泊まっているホテルのわきを、牝牛の群れが通りかかりました。その時、私は講演会のことを考えていたので、この牛たちが何のためにこの地上に存在しているのかを深く考えもしないで、何と幸せな生き物たちだろうと思いました。しかし、飼われている牛たちにとって生きること、つまり飼われている目的とは、人間に牛乳や食肉を提供することにほかなりません。また動物は、生きる意味について熟慮する能力がありません。ここに動物と人間の違いがあります。にもかかわらず多くの人は、一体自分は何のために生きているのかを自問することなく、生き、そして死んでいくのです。それでは

動物といくらも違わないではありませんか。人を真に人間たらしめるのは、「自分が何のために存在し、何のために人間であるのか、何のために生きるのか」を自問することにあるのではないでしょうか。

表面的で、あさはかな答え

「人は何のために生きるのか」という質問に対して、この世にはいろいろな「表面的であさはかな答え」があります。私はそのような答えに出会った一つの体験を持っています。ヒットラー独裁時代の一九三六年、ミュンスターという町の学生たちから、「私の人生の意味」というテーマで話して欲しいという依頼がありました。行ってみると、彼らは私の講演を聞きたかったのではなく、このテーマについて私と議論を交わしたかったようでした。そこで私は早速彼らに尋ねました。「私たちの人生の意味は何でしょうか。私たちは何のために生きるのでしょうか」

当時の若者は皆、ヒットラーのドイツ国粋主義に心酔していましたから、私の質問に対してすぐ一人の若者が立ち上がって言いました。「私は、国家と国民全体のために存在するのです。この関係は樹木とその葉みたいなもので、木の葉一枚一枚はあまり意味がないが、葉が集まった樹が存在の意味を持つのと同じです」。それに対して私はこう尋ねました。「そうですか。ではその樹は何のために存在するのですか。つまり、何のために国民は存在するのですか」。彼は答えることができませんでした。つまり彼の答えは、私の質問に対して「表面的で、あさはかな答え」でしかなく、本質的な答えになっていなかったのです。若者の答えは、問題の回答を少しだけ先に延ばしたに過ぎません。そこで私は彼らに言いました。「ある質問に対して先送りするような答えをしてはいけないのです」

私は、改めて彼らに質問し直しました。「それでは、人生の意味は何でしょうか。私たちは何のために生きているのでしょうか」。するともう一人の青年が立ってこう説明を始めました。「与えられた義務を果たすために私はこの地上にいるのだと思います」。私は言いました。「その通り。ではその私の義務とはいったい何ですか？私自身のことを言わせてもらうなら、私の義務はあなた方に神様の言葉を伝えることにあると思っています。さて、あなたの義務とは何なのでしょうか？」

ここで、私がかつて出会ったことのあるお役人の話をしましょう。その人は次のように言いました。「ここだけの話ですが、私は毎日書類にサインばかりしています。でも、この書類が全て焼失してもこの世は何事も無く続いていくでしょう。私はこんな無意味な仕事を毎日していることに悩んでいます」。ところで、義務とは一体何でしょうか。ヒットラーの第三帝国で、ゲシュタポは何百万という人間を殺害しました。そして、彼らが裁判にかけられたときの主張は、「我々はただ単に与えられた義務を果たしただけだ。私は命令に従ったに過ぎない」というものでした。

たとえ強制されたにせよ、大量殺人を犯すことが「人間の義務」だなどと、どうして言えるでしょうか。私には到底そんなことは言えません。

そこで私は学生に言いました。「これこそが問題の本質です。そもそも、私の義務とは何でしょうか。誰かそれについて答えられる人はいますか？いませんか？どうやら問題はまた元の出発点に戻りましたね」

青年たちは真剣に考えていました。やがて別の一人が立ち上がって、自信に満ちて話し始めました。「私は貴族の出身です。その血統は十六代前にまでさかのぼることができます。この貴族の血統を継承することが私の人生の目的だと言っていいのではないでしょうか」。そこで私は答えました。「過去十六世代にわたって何のために生きてきたのかわからないままで、十七世代目を付け加えても、そこにどういう意味があるのでしょう」

おわかりになっていただけるでしょうか。このように「人生の意味とは何か」という質問に対して、実にたくさんの「表面的で、あさはかな答え」が返ってきます。新聞の死亡通知欄には、よく次のように書かれています。「彼は仕事のためだけに生きた。自分のことなど考えず、家族のために努力した。それが彼の生きる目的、最大の義務であった」。こういう記事を目にするたびに、私は悲しみを覚えます。これではまるで馬と同じではないかと思うのです。馬はただ働くしかありません。しかし人間は、あくせく働くためだけに生きている存在であっていいのでしょうか。もしそうだとしたら、実に嘆かわしいことです。懸命に働くことだけが人生の意味だと考えるなら、冒頭でお話した若者のように、生きることに虚しくなって自ら生命を絶っても不思議ではありません。働くことは私たちの人生の目的ではないのです。

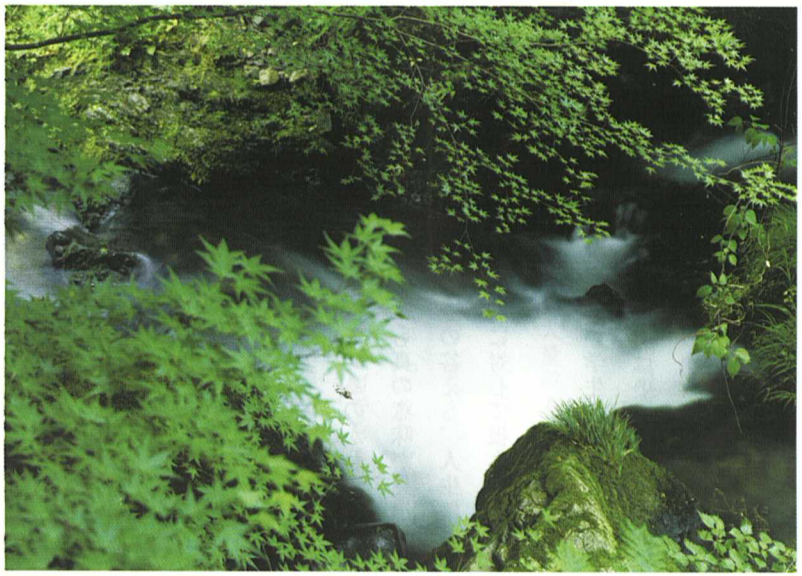
別の学生が語り始めました。「私は医者になろうと思います。患者の生命を救うことができれば、それこそすばらしい人生の目標ではないでしょうか」。そこで私は答えました。「そうですね。だけど、その患者自身が何のために生きているのかわからなければ、人の生命を救うことにも真の意味が見出せないのではないでしょうか。その答えも、人生にどんな意味があるのかという質問に対して根本的な答えにはなっていません」

その場には他にも大勢の若い学生がいましたが、私は、彼らが教養を身につけてはいても、基本的に何のためにこの世に存在するのかわからないで生きている、ということに驚きました。

多くの場合、このような議論を続けていくと、最

後には次のような答えにたどり着くことになります。「人生には深い意味などない。私が生まれたのは全く偶然であり、その背後には何の意味もない。だから私たちが唯一できることは、最大限に人生を楽しむことだ」。言い換えると、「私の人生に意味はない。両親が結婚しなければ、私が生まれることもなかった。偶然で私は存在している。だから私の人生は基本的に無意味だ」。このような虚無感を持つ人は、人生において辛く苦しいことに遭遇すると、容易に自殺願望に捕らわれやすいのです。「なぜ、この辛い人生を続ける必要があるのか。すべてが偶然であり、無意味であるなら、自分から終わりにしてもいいのではないか」

皆さんはご存知でしょうか。西独における自殺者数は交通事故の死者よりも多いのです。そして、自殺者の半数は三十歳以下の若者です。この数字が現代の恐ろしさを表わしています。多くの現代人は生



きることに何の意味も見出せないでいるのです。

私と話した大勢の人々は次のように訴えます。「人生は無意味です。だから私は刹那的享楽に身を任せるか、または自殺の誘惑に負けて、わが身を投げ捨てるかしかありません」。そこで私は彼らに聞き返しました。「あなたは今まで人生が全く無意味であるかのように生きてきましたが、もしあなたの人生にはっきりとした意味があるとしたら、あなたはどうしますか？あなたの人生の結末はどうなると思いますか？」

聖書には次のようなみことばがあります。

人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている……。（ヘブル　9・27）

この聖書の真理を無視して、人は自分の人生の真の目的を知ることなどできないのではないでしょうか。私たちは人生の真の意味を知らずして、死後に神のさばきを受けてもいいのでしょうか。「人は何のために生きるのか」。この質問の答えは核心に近づいて来たようです。では更に次に進みましょう。次のテーマは以下に記したものです。

誰がこの質問に対して答えられるのか

「人は何のために生きるのか」という質問に対して答えられるのは一体誰でしょうか。牧師でしょうか？大学の教授、それとも哲学者でしょうか？いいえ、彼らにはこの質問に対して答えを出すことはできません。私たちが何のために生きているのか、それについて明快な回答を出せるのは、ただ一人のお方しかありません。そのお方は私たちを創造し、私たちにいのちを与えられた神です。

誰かが何かを作り出そうと作業している時、その人自身が説明してくれなければ、その作業中のものが何なのか、また何のためのものなのかわからないでしょう？それと同じように私たちの人生も、私たちを創造した方だけが、何のために私たちを創造したかを説明できるのです。つまり、「私たちは何のために生きているのか」という質問は、創造主なる神の啓示を通してでなければ答えを得ることができません。その答えは、まことの神だけが与えてくださるのです。

「私たちは何のために生きているのか」。この質問の答えを求めて、多くの人々が聖書にたどり着きました。私もそのひとりです。実際、この「呪われた世界」になぜ自分が置かれているのかを知らなければ、決して耐えることはできないでしょう。あなたにとって、この「呪われた世界」という言葉は厳し過ぎますか？この言葉は聖書に出てくる言葉です。現代の世界は大変な呪いの下に置かれているのです。そしてその中に生き続けることは、神の啓示を通して答えが与えられなければ耐え難いものです。まことの神は「生きる意味」について、聖書の中で私たちに答えておられます。ですから聖書は私たちにとって重要な意味を持っています。聖書など読まないという人がいますが、そういう人は「何のために生きるのか」という質問について真剣に考えたことがないのではないでしょうか。残念なことに、このような風潮は世界中に広まっています。ここで、聖書の答えを簡単な言葉にまとめると次のようになります。「神は、私たちを神の子どもとするために創造された」

父親はだれでも「自分自身の姿」を息子の中に見出したいと思うものです。神も人間を「神ご自身の御姿」に似るものとして創造されました。神が私たちに望んでおられるのは、「私たちが神の子どもになり、いつも神に語りかけ、また神も私たちに語りかけることができるようになる」ことです。神は私

たちを限りなく愛しておられますが、私たちもまた神を愛することを望んでおられるのです。

あなたは神に祈っていますか？父親にとって、子どもが長年にわたって話をしてくれないほど辛いことはありません。つまり、祈りをしない人間は天の父なる神と全く話をしないのと同じ状態なのです。神は、私たちが神の愛する子どもとして神に話しかけ、神を愛することを望んでおられます。そのために私たちはこの世に置かれているのです。

私はキリスト教やその他の宗教の教義について話しているのではありません。私たちを創造された神、今も生きて働いておられる神について話しているのです。その方があなたを神の子どもとなるように創造されたのです。あなたは、いますでに神の子どもになっていますか？

さらに一歩前進しましょう。私たちは神の子どもとなるべき存在ですが、生まれながらに、そのままで神の子どもと言える状態にあるとは言えません。聖書の創世記には、「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。」（創世記　1・27）とあります。しかし人は、その直後に大きな過ちを犯してしまいました。神は、人を神に似たものに造られると同時に、自由意志を持つものとして創造されました。そして人はその自由意志によるあさはかな決断、神に反する決断をしてしまいました。初めに神によって造られたアダムとエバは、神によって禁じられていた木の実を食べました。この行為が意味するのは、「私は自分自身を支配する。私は神なしに生きていける」ということです。アダムは神の存在を疑ったわけではありませんが、自分自身を神から切り離して「自分の人生は自分で決める」という態度を取ったのです。

最近、或る人が私にこう言いました。「ブッシュさん、あなたはいつも神様の話をしておられますね。でも、私にはどうしても神様を見つけることができ

ないのです。どうすれば神様を見つけられるでしょう?」そこで私は次のように答えました。「何万年もの昔にタイムスリップすることを想像してみてください。タイムマシンに乗って、人類が創造された最初の時代を旅していると考えてみてください。私は美しい楽園の庭を散歩していました。そこで、茂みに隠れている最初の人間アダムに出会ったのです。『今晩は、アダム』と私。『今晩は、ブッシュさん』とアダム。私が考え悩んでいる様子を見て、アダムは『何をそんなに考え込んでいるのですか』と聞いてくれたのです。私は言いました。『私は多くの人々から"どうすれば神様を見つけられるのか"と聞かれるので、どう答えればいいのか考えていたのです』。アダムは笑って、『どうすれば神様が見つかるかなんて、簡単なことじゃないですか。神様はそこに存在しているのですから。むしろ、みんなが本当に知りたいのは"どうすれば神様から逃げることができるか"じゃないですか?それこそが難しいのです』と言いました」

アダムが皮肉を込めて言ったことは真実です。神は確かに存在します。その気になれば人は簡単に神を見つけることができます。でも、人は神から逃れることができないのです。過去三百年の精神史を見てごらんなさい。多くの人々が神から逃れられると考えて戦ってきました。しかし、神から逃れることは人間には不可能なのです。皆さんも心の底では、神は存在するかもしれない、と思っておられるのではないでしょうか。しかし、あなたは神の存在を認めようとせず、したがって神に属していないだけではないでしょうか。多くの人々は、神についての真に重要な質問をなおざりにしているのです。神の存在を否定はしないが、神に属することもしない。神の敵ではないが友でもない。そのようにして人生最大の問題を未解決のまま放置しているのではないでしょうか。

あるスイスの精神科医は自分の著書の中で「生きていくための重要な問題を解決しないままでいると、人は精神的な傷、つまり心のトラウマを持つことになる」と書いています。現代の人間は神に関しては病んでいるのです。多くの人間は神を否定はしないが、神に属することもしないのです。結局は神に属したくないのです。

現代人は神に興味を失ってしまっているとあらゆる所で言われています。実は私もその現代人のひとりですが、私はそうは思わず、神に深い関心を抱いています。そして皆さまにも、この神の問題に対して解決を得ることを真剣に考えていただきたい、と心から願っているのです。

「私たちの使命は、神の子どもとなる」ことです。そのことに関心を持たない限り、人としての使命を果たしていないことになります。人は生ける神の子どもとなって初めて、本当の人間になるのです。

最も大切な質問に対する神の答え

繰り返しますが、私たちは生まれながらに神の子どもなのではありません。私たちは「いつかは神の子どもになるために、この世におかれている」のです。そこで、私たちの人生に神の子どもとなるための「何か」、つまりきっかけになる出来事が起こらなければなりません。

私たちは最初から神の子どもではないのですから、神を愛することもなく、神の訓戒を守ることもなく、神のことを考えることもなく、神に祈ることもしません。ですから次に大切な質問は、「どうすれば、生きておられる神の子どもになれるのでしょうか」です。

ここで、できることなら読者の方々に紙と鉛筆を配って、「どうすれば神の子どもになれると思いますか?」の答えを書いていただきたいところです。或る人はこう答えるでしょう。「私が良い行ないをすることによって」。また他の人は「神様を信じることによって」と書くでしょう。でも、このような答えでは十分ではありません。最大のポイントは「どうすれば神の子どもになれるか」ということです。全ての質問の中で最も大切なこの質問に対しての答えは、神ご自身が答えてくださらなければ私たちにはわかりません。神がいかにして私たちを子どもとして受け入れてくださるのか。それは神ご自身が解き明かしてくださらなければ私たちにはわかりません。ですから聖書には、神による明らかな答えが提供されているのです。その答えとは、「イエス様を通してのみ神の子どもになる道が得られる」というものです。聖書の言葉は要約すると次の通りです。

「イエス様は、神の国からこの世に来られた」

これを聞いたあなたは、「神の国って、恐らく私より高い所にあるのだろう」と思われるかもしれません。ですが実際には、神は高いところからだけでなく、「ありとあらゆる方向からあなたを包んでくださる」のです。私たちは、高さ、幅、奥行きからなる三次元の世界に生きていますが、それ以外にも次元は存在し、神のおられる次元は全く異なった次元です。言い換えると、神は目には見えないが、あなたの近く、手の届くすぐそばにおられるのです。また神はいつもあなたとともに歩んでいてくださるのです。そして、あなたが神を知らないままに人生を歩む様子を見て、心を痛めておられるのです。しかし私たちの力では神がおられる次元への壁をぶち破ることも、神がおられる次元への扉を開けることもできません。それができるのは神だけです。ですから神ご自身が壁を破り、イエス様の姿をとって私たちの所へ来てくださったのです。

聖書にはこう書いてあります。

この方(イエス様)はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。　(ヨハネ　1・11)

イエス様はこの地上、本来イエス様のものであるべきご自分の国に来られたのに、人間は扉を閉ざして受け入れようとはしなかったのです。父なる神はそれを見て、人間に対する関心を捨ててしまわれたでしょうか。いいえ。聖書の言葉は次のように続いています。

しかし、この方(イエス様)を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。　(ヨハネ　1・12)

イエス様を信じ受け入れた者は神の子どもとされるのです。これこそ真に驚くべきことではないでしょうか。あなたは自分の人生の扉をイエス様のために開いてみようとは思いませんか?

第一次世界大戦の頃、私は若い将校でした。神から遠く離れている者でした。しかしイエス様を人生に受け入れて私の人生は一変しました。私はイエス様を信じたために投獄されたこともあり、多くの困難な道を歩みました。けれども、私は一度も後悔したことはなく、聖書のみことばに支えられて生きて来ました。私は「神の子どもとされた」ことによって、私の人生に真の意味を見出すことができました。勿論あなたも、どのような職業に就いていようとも、牧師であろうと、経営者であろうと、会社員であろうと、主婦であろうと、教師であろうと、神の子どもとされるなら、その瞬間に例外なく確実に人生の真の意義を見出すことができます。ともかく、まずイエス様を受け入れることです。そうすれば、神はあなたが確実に人生の真の意味を見つけるようにしてくださいます。

その一つの実例を新約聖書から見てみましょう。

その人はマグダラのマリヤです。彼女の人生は荒廃したひどいものでした。彼女は七つの悪霊にとりつかれていました。彼女は本能的な欲望と情熱に苦しめられ、疲れ果てていました。そのような彼女の人生に突然イエス様が入って来られたのです。神の御子であり救い主であるお方が、彼女に入っていた悪霊を追い出されたのです。イエス様にはそうすることが可能であり、また実際にそうしてくださったのです。その瞬間からこの女性は主イエス様のものとなり、彼女の人生はもはや虚しいものではなくなったのです。

彼女はその後、イエス様が十字架につけられ、殺される現場に立ち会う体験をします。その時、彼女は悲しみに打ちひしがれ、かつての虚しい罪の中に戻されてしまうのではないかと怖れたことでしょう。

しかし、イエス様が十字架につけられてから三日目の朝早く、彼女はまだ暗いうちにイエス様の墓に来ました。彼女が墓に来た時、墓から石がとり除けてあり、中はからっぽでした。マリヤは驚いてお弟子たちにこのことを告げ知らせた後、また墓に戻り泣いていました。この女性の気持ちは痛いほどよくわかります。もし、私が今日イエス様を失うことがあったとしたら、きっと悲しみと虚しさのどん底に突き落とされることでしょう。彼女は自分の救い主がいなくなり、自分がどのようにして生きていけばいいのかわからなくなったに違いありません。突然その時、後ろから聴きなれた声が聞こえました。「マリヤ」。彼女が振り返ると、そこによみがえられたイエス様がおられました。喜びの涙が彼女の頬を伝わり、絶望から回復された彼女はこう言いました。

「ラボニ（わが主よ）」

マリヤの例から明らかなことは、人生の意味に対して答えを与えることができるのは哲学などではないということです。マリヤは罪深い自分の人生の中で生きる意味を見失っていました。しかしイエス様を受け入れた瞬間、この問題は解決されました。「神の子ども」とされ、彼女の人生は意味のあるものとなりました。イエス様の十字架の死により、一旦はまた人生の意味を見失いかけました。けれどもイエス様のよみがえりを体験することによって、再び、更に深く大きな生き甲斐のある人生の光の中に置かれたのです。よみがえられたイエス様は、今日も生きて天の神の右の座におられ、いつも私たちに温かい眼差しを注がれ、手を差し伸べていてくださるのです。私たちの信じるイエス様は、今も生きて働いておられる永遠の主です。

ですから、私は皆様に「ぜひ、イエス様を受け入れてください」とお願いしたいのです。イエス様はあなたを待っておられます。今日、家に帰られたらぜひ、イエス様と話してみてください。イエス様はあなたのすぐそばにおられます。そしてイエス様に次のように呼びかけることができれば何とすばらし

いことでしょう。「主イエス様、私の人生は虚しく無意味です。どうかマグダラのマリヤのように、私の所にも来てください」

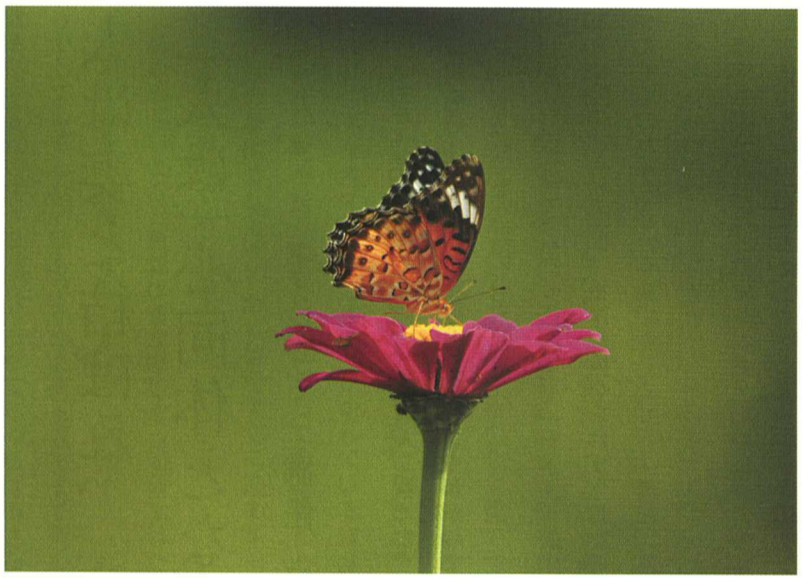
私たちがイエス様を受け入れると人生に大きな変化が起こります。私たちが罪を告白し、イエス様を信じ受け入れたその時、私たちはイエス様の十字架のみわざによって救われ、罪を赦され、新しいいのちの中に移されます。私たちの罪に汚れた古いからだは、その時、イエス様の十字架の死にあずかって一旦死にますが、すぐにイエス様がよみがえられたように「神の子ども」として新しく生まれ、そこから新たな、意義のある人生を歩むようになります。私たちは聖書にある約束の通り、一人ひとり例外なく神様から「聖霊」をいただきます。勿論、あなたもそのことを確実に体験することができます。

まずはともかく、イエス様を受け入れてください。イエス様を受け入れるとあなたは新しい存在になるのです。「神の子ども」になるということは、思考の変化を意味するのではなく、全く新しい存在となることを意味します。

私は、この本を読んでおられるあなたに、「古い自分の罪に死に、神の子どもとなって生まれ変わり、まことのいのちに生き、神をほめたたえる、というすばらしい体験」をご自分のものにしてくださるよう心から願っています。それこそが、あなたがこの世に「何のために存在しているのかを知る」唯一の方法です。どうか今、イエス様を信じ受け入れて、真の生きがいのある人生を始めてください。そしてそのことを通して、天の父なる神がご栄光を現わしてくださいますようにと祈っています。

私がこの本で語ったことは、一人の牧師の考えや宗教上の教義などではありません。「あなたの人生と死」に関わることです。「永遠に生きるか死ぬか」の問題なのです。主イエス様は言われました。

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。（黙示　3・20）

このように、主イエス様は私たちに呼びかけておられます。「あなたの人生の戸のすぐ外にわたしは立って待っています。すぐ開けてください。わたしはあなたの人生に意味を与えたいのです」

私たちの人生は一度しかありません。何のために生きるのかということは最も大切な質問です。神は、十字架につけられてよみがえられたイエス様の中に明確な答えを示しておられます。今、この瞬間もイエス様はあなたの人生の戸の外に立って叩いておられるのです。ぜひ、その扉を開けてください。決して後悔することはありません。